

Eureka XIII

六年制通信 No.35 令和8年2月6日(金)号

青年

『万華鏡』の何月号か忘れましたが、サミュエル・ウルマンの「青春の詩」を紹介しました。それで先週号の「ユリイカ」で触れた新渡戸博士の『修養』に確か青年について書いてあったのを思い出しました。再読してみましたが、なるほどと思えるところもあるし、時代があまりにも変わっているので、現代に生きる君たちにはピンと来ないところもあると思いました。私なりに解釈しながら、少し紹介したいと思います。

青年という言葉の起こりについて、『詩経』にある「青々子衿(せいせいしきん)」から来ているのではないかと考えられます。昔は書生が青色の衿(えり)の服を着ていたので「青衿子(せいきんし)」と呼ばれていたのですね。青年という言葉はこれと関係がある、かもしれないとしながら、いや、やはり「青々とした葉っぱを出した草花」の意味から来たのだろうと博士は推測しています。私は、別にこの言葉の語源はどちらでもいいのですが、「青」の持つイメージには確かに若々しさがあると思います。

博士は「緑なるひとつ草とぞ春は見し 秋はいろいろの花にぞありける」という道歌を引き合いに出して青年というものを解説しています。「この歌のとおり青年というのはちょうど春の野辺のように青々としていて、それがどんな種類の花を開くか、どんな性質の実を結ぶか、すなわちいかなる向上発達を遂げるかわからない。将来に大なる望みのある所が、青年の青年たるゆえんである」のだと。青年は大なる希望を有する者を称するわけだから、年齢の多少を問わないわけです。希望さえあれば六十になっても青年と呼んで差し支えないと言っています。このあたり、まるでウルマンの詩ですよ。しかし逆に考えれば、希望を持たぬ若者は青年とは言わないわけですね。

私は実体験として、「青々とした葉っぱを出した草花」から出てくる青のイメージを青年に重ねるのはよくわかります。なぜなら、青年の大きな特徴として「将来どんな花を咲かせるかは、葉の段階ではわからない」と思えるからです。そして、どの葉も大きな違いはないということも言えると思います。私は中学高校の若者に関わる仕事をしているわけですが、ちょうど少年から青年へと変わっていく様を見ることが出来ます。これはなかなか大きな変化です。見ていて楽しいですよ。しかし、その先にどんな花を咲かせるのかを、知ることはできません。勝手な予測をすることはできますが、現実はおそらく私の予想とは違うことでしょう。今の君たちは、教壇から見ればさして能力に違いはないように見えます。しかし、三十年後を考えてみればそれぞれの咲かせる花には大きな違いがあることでしょう。花は一生をかけて大事に咲かせていくものですからね。卒業してからも不断の努力が必要です。今の君たちの努力が、卒業後の精進

が花開くのはまだまだ先です。私がたかだか十八歳くらいで入った大学を後生大事に「学歴」と称し、自慢している愚かな人を笑う者は、まだ花を咲かせてもいない草が他の草に自慢しているように見えるからです。笑えるでしょ？

中学高校では、のちに咲かせる花は知りようがないかもしれませんが、だからと言ってさぼっていいわけではなく、むしろまだ見えない花を潜在的に育てているのだと考えれば怖くてさぼりようがないように思います。さらに卒業してのち、努力を怠れば根から弱っていくかもしれないわけですから、これもまた怖くて精進を怠ることはできないでしょう。勉強はね、一生続くのですよ。

博士は努力・精進を続けるためには、どういう職業に就きたいかをよくよく考えることが大切だと言います。これは単に憧れだけではダメで、いいなあと思う仕事でも見えない苦労はあるのですから、そのあたりも考えないといけないと。しかし私は、むしろ自分にはできそうもない仕事を知っておくことが大切ではないかと思えます。どんな仕事でも実際にしてみないと本当の苦労も喜びもわからないものですが、ただ、自分の苦手な分野かどうかだけはわかると思うので、その方面には進まないことです。今の私は、どうしても無理だと思う仕事でなければ縁のあったところで頑張ればいいと思えます。よく、これが自分の天職だと言えるような仕事を探そうなどと言いますが、始めてもいないうちに天職かどうかなどわかるはずもないでしょう。そうではなく、始めた仕事を天職に思えるほど頑張ればいいのだと、そう思っています。

今週のおすすめ

・脚本：羽原大介 ノベライズ：青山美智子 『ビューティフルレイン』（扶桑社）

主人公の女の子の名が「美雨」で「みう」、したがって **Beautiful Rain** なわけですね。小学校2年生の美雨を演じるのは芦田愛菜。反則級の可愛さです。妻を亡くした父親は豊川悦司。この人の「愛していると言ってくれ」はもう何年前のドラマなのでしょう。手話で「あ・い・し・て・い・る」とできるようになったのはあのドラマを観たからでした。あの時は耳の聞こえない画家を演じていましたが、今回は若年性アルツハイマーに侵される父親役です。私はこのドラマは飛び飛びにしか観ていないのですが、シナリオはドラマの脚本を忠実に小説にしたものです。

やはり、こういう話は自分だったらどうするかと考えながら読んでしまいますね。荻原浩の『明日の記憶』も若年性のアルツハイマーを扱っています。渡辺謙の主演で映画にもなりました。これも本も読み映画も観ましたが、一体どうすればいいのだろうという、結論の出ない途方に暮れる感覚は『ビューティフルレイン』の方が強いですね。なんせ小さい娘のことも忘れていく未来が確定しているのですから。『明日の記憶』では奥さんと結婚を控えた娘さんがいるのですが、これはまあ、自分がいなくなっても何とかかなるかと思ってしまいます。しかし、小さい娘ひとりが残されるのですから、どうにも気持ちの持って行きようがなくなります。それでも町工場働く主人公を支える社長や従業員たちの温かさが救いになっていますけどね。

BGMは 曾根由希江 の *HOME* でした…。